学校推薦型選抜の課題

高校教員が勧める推薦とは？

大学入学者の約36％を占める学校推薦型選抜。高校への取材から、その課題と望ましい形を考える。

入試結果を左右する高大間での信頼関係

学校推薦型選抜の入学者数[*1]は、私立大学では41％と一番多い。国立大学は12％、公立大学では26％であるものの、その比率は高まりつつあり、設置区分問わず、大学にとっては早期に高校のお墨付きの学生を確保できる選抜、高校や高校生にとっては進学先を決められる選抜として、今後も募集枠と受験者は増えると思われる。

学校推薦型のうち、入学者数の54％[*2]を占めるのが指定校推薦。私大では6割にも上るが、早期合格を望む生徒が安易に利用し、入学後にミスマッチに気付き中退、というケースも少なくない。その予防のため、模試の成績や高校での活動状況などで高校独自の推薦基準を設ける高校もある。

国公立で多い公募制に関しては、一般選抜との両立が課題としてあがった。高3・秋は小論文・面接の対策と一般選抜の学科試験対策の時期が重なる。合格発表が12月なので、不合格だった場合、一般選抜に向けたリカバリーも難しい。そのため、最初から一般選抜の前哨戦として学力重視型の試験内容を望む高校もあった。

合否基準の不明確さについては、多くの高校教員が言及している。基準が不明なままでは、高校側は次の進路指導で自信を持って生徒に勧めたり、大学に推薦したりすることは難しいだろう。「評価基準を明確にして公表する」「合否の理由について高校にフィードバックする」といった積み重ねが、結果的に望ましい学校推薦につながるのではないか。

本来、学校推薦型選抜は「生徒の第1志望とマッチする大学であれば勧める」（奈良育英中学・高校）というように、マッチングにおいては合理的な入試制度だ。鍵は、高校と大学の信頼関係だろう。今後の学校推薦型選抜のあり方（案内のしかた、基準、枠の増減等）や高校とのつきあい方で「生徒を安心して送り出せる」大学と認識されるかどうかが変わる。今回紹介した高校教員の声を参考に、現状を見直してほしい。

選ばれる学校推薦型選抜

1. 高校との信頼関係構築が重要
入試の内容だけでなく、入学後の学生の様子などもフィードバック
2. 他の選抜との関係を考慮
総合型と一般の間に実施するため、前後の選抜との流れで試験内容等も検討を
3. 合否の基準をわかりやすく開示
基準や合否の理由が明確であれば、大学にとって望ましい生徒が推薦されやすい

*1 文部科学省「令和5年度国公私立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要」
*2 文部科学省「令和5年度大学入学者選抜の実態の把握及び分析等に関する調査（リベルタス・コンサルティング）」

高校の学校推薦型選抜に関する対応例

話を伺った方	札幌光星中学・高校 進路・学習指導部副部長　中村大輔 ▶種別：全日制／普通科／共学 ▶生徒数：1学年約360人（105人が中学から内部進学）	西武台千葉中学・高校 副校長 薄井充宏／高校教頭 福島英行／進路指導部 部長 秋葉雅樹 ▶種別：全日制／普通科／共学 ▶生徒数：1学年約276人	岐阜県立長良高校 進路指導主事　箕浦誠 ▶種別：全日制／普通科／共学 ▶生徒数：1学年約360人	和歌山県立田辺高校 進路指導部長 葛石浩恭／ESD推進室 室長 小竹博允／進路指導部 清水昌樹 ▶種別：全日制／普通科、自然科学科／共学 ▶生徒数：1学年約280人	奈良育英中学・高校 進路指導部長　東浦将太 ▶種別：全日制／普通科／共学 ▶生徒数：1学年約350人	広島桜が丘高校 進路指導部、2学年主任　沖村将彦 ▶種別：全日制／普通科／共学 ▶生徒数：1学年約300人
主な進学先	北海道大学、東北大学、小樽商科大学、室蘭工業大学、北見工業大学、釧路公立大学、公立千歳科学技術大学、札幌市立大学、北海学園大学、北海道医療大学、北海道科学大学、北星学園大学、札幌学院大学、日本医療大学、藤女子大学、早稲田大学、慶應義塾大学、上智大学、東京理科大学、明治大学、青山学院大学、中央大学、法政大学、東洋大学、千葉工業大学など	千葉大学、埼玉大学、早稲田大学、慶應義塾大学、上智大学、東京理科大学、明治大学、青山学院大学、立教大学、法政大学、東洋大学、日本大学、駒澤大学、専修大学、獨協大学、國學院大學、武蔵大学、千葉工業大学、文教大学、東京電機大学、大東文化大学、順天堂大学、帝京大学、神田外語大学、国士舘大学など	岐阜大学、福井大学、富山大学、愛知教育大学、静岡大学、滋賀大学、愛知県立大学、岐阜県立看護大学、公立諏訪東京理科大学、滋賀県立大学、長野県立大学、愛知大学、中京大学、南山大学、名城大学、岐阜聖徳学園大学、岐阜医療科学大学など	和歌山大学、鳥取大学、徳島大学、名古屋大学、神戸大学、金沢大学、和歌山県立医科大学、都留文科大学、大阪公立大学、横浜市立大学、中央大学、明治大学、早稲田大学、立命館大学、同志社大学、近畿大学、関西大学、京都産業大学、龍谷大学、佛教大学、関西学院大学など	大阪公立大学、大阪教育大学、奈良教育大学、奈良女子大学、和歌山大学、京都府立大学、奈良県立医科大学、奈良県立大学、早稲田大学、関西学院大学、関西大学、同志社大学、立命館大学、京都産業大学、近畿大学、龍谷大学、摂南大学、追手門学院大学、桃山学院大学、武庫川女子大学、畿央大学、京都女子大学など	筑波大学、長崎県立大学、広島修道大学、広島経済大学、安田女子大学、比治山大学、広島文化学園大学、広島国際大学、広島都市学園大学、広島女学院大学、広島工業大学、広島文教大学、川崎医療福祉大学、岡山理科大学、環太平洋大学、駒沢女子大学、中京大学、関西外国語大学、京都産業大学、京都外国語大学、関西大学、松山大学など
進路指導の取り組み	▶5教科の学習を最後まで続けてもらうよう働きかけている。これは、生徒が幅広く学びを修め、「自分ができること」を増やして達成感を得た結果、国公立でも私立でも、自分が本当に行きたい大学に進学してほしいという考えによるものの。▶道内では公立高校進学重視のため、私立の生徒は劣等感を持つ者もいることから、自信を付けさせたいという意図もある。	▶学校としては「国公立大合格者10人、難関私大合格者50人」が目標。入れる大学を探すのではなく、生徒の第1希望優先の指導。▶生徒の夢をかなえるキャリア教育として、教員養成（**文教大学**や小学校と連携）、メディカル（医療系大学や病院と連携）、ICT（**江戸川大学**や企業と連携）といったプロジェクト活動に力を入れるほか、リベラルアーツ講座や気象予報士、中国語講座なども設け、進路選択に影響した例もある。	▶教育方針は文武両道。バランスのよい人材の育成をめざす。▶進路指導の目標は「国公立大進学者120人程度（生徒数の3分の1）」。5教科の総合的な学力を育成する。▶5教科の力をバランスよく身に付ければ、大学入学後や社会に出てからも新しい発想を生み出せる。将来活躍してほしいので、絞らず学習するようアドバイスしている。	▶地域に高校が少ないことから、生徒の学力や進路は多様。個別の対応を心がけている。▶ユネスコスクールに指定されており、ESD（持続可能な開発のための教育）の拠点校。1年生から、SDGsや地域の存続に向けた課題解決にまつわる探究活動に取り組む。▶国際理解教育にも力を入れ、**大阪観光大学**協力のもと、留学生と交流。	▶一般選抜での合格を基本路線としながら、多様化される入試方式（総合型・学校推薦型選抜等）に対応した指導。▶探究教育をはじめ、生徒の真のやりたいこと、学びたい学問について考える機会（行事）を多く設けている。▶年内入試を志向する生徒が増加。年内入試の情報は個々の生徒の希望進路や適性に応じて伝える。	▶校訓は「自考自創」。自分が生きたいように生きられる力を身に付けることを理想とし、非認知能力の育成に力を入れる。▶探究に力を入れ、総合的な探究の時間は週5単位。「なりたい自分」を探すために「自分らしさ診断ワーク」に取り組み、将来学びたい、就きたい分野を調べる。▶大学の教育や求める人材、就き方がわからない職業なども、先生の協力を得ながら生徒は「なりたい自分」をめざす。
生徒の志望状況	▶一般選抜8割、年内入試2割。年内入試では、総合型よりも学校推薦型が多い。真面目な生徒が多いので、総合型よりも一般選抜や学校推薦型のほうが合格しやすいため。▶最近、したいことができる大学重視の傾向が強まっており、国公立に受かっても私大を選ぶような生徒も。道内進学者が65％だが、本校の生徒ならたいていの道内の大学に入る学力はあるので、道内の大学を積極的には選ばなくなってきている。数学が苦手だからという理由で、興味がなくても文系を選ぶ生徒が増加。大学は文理選択前の高1生に対してタネまきを。社会変化と結びつけながら理系の学びの魅力を伝えてほしい。	▶一般選抜3割、学校推薦型が42％、総合型が28％。学校推薦型は指定校が多く、公募制は少ない。というのも11月に受験、12月に合否判定のため、不合格の場合のリカバリーが難しいから。そのため、総合型をまず受け、ダメだったら公募制で再挑戦という流れが多い。▶理系に力を入れており、文系でも3年で数学をやる。理系と文系の比率は同等か、理系が多いことも。▶大学に対する認識が古い保護者も多いので、保護者向けの大学見学ツアーなどあってもいいのでは。	▶国公立大進学者は一般選抜と年内入試の割合が2：1程度。▶私立大の場合、併願可能な公募制の学校推薦型を受けて進学先を確保しておき、第1志望大を一般選抜で受ける生徒が多い。▶地元志向が強く、岐阜・愛知への進学者が多い。次いで近畿エリア、首都圏という順番。▶「親に勧められたので、国公立大学に行きたい」といった生徒も少なくないが、最近は文理融合型の学びを希望したり、地域活性化や持続可能な社会のあり方に関心を持つ生徒も増えつつある。	▶一般選抜と年内入試の割合はおよそ7：3。▶第1志望を貫き通す生徒が多く、公募制推薦で不合格でも、一般選抜で合格するパターンが多い。年内入試では圧倒的に学校推薦型での受験者が多く、年々増えている。国公立は60人、私立も入れると100人は超える。▶自宅から通える大学が少ない地域のため、下宿の手配など、入学準備に手間がかかることから、「早く進路を決めさせたい」「近畿圏内の大学に進学してほしい」といったような保護者の意向が生徒の志望校選択に強く影響している。	▶一般選抜3割、総合型2割、学校推薦型5割。▶関西エリアの難関私大、中堅私大の受験者が多い。▶第1志望の受験機会を増やすために年内入試にチャレンジする生徒もいれば、すべり止め校を年内から受験し、一般選抜で挑戦枠にチャレンジする生徒も数多い。▶2024年度入試は安全志向が強く見られた（年内入試での合格増）一方、最後まで踏ん張った生徒も多く、一般選抜での合格者も増加した。第1志望を公募制推薦で受験し不合格だった場合は、一般選抜で第2志望以下の大学を受験するパターンがめだった。	▶一般選抜と年内入試の割合が1：5程度。以前は1：9と圧倒的に年内入試が多かったが、「一般選抜に最後まで挑戦してでも、大学に進学したい」と考える生徒が増えた。▶総合的な探究の時間を通して進路をよく検討させていることが影響し、偏差値や模試の合格可能性判定ではなく、「したいことができるか」「世の中をよくするために自分は何を学べばよいか」から志望校を選択できている生徒がめだち始めた。それらの生徒の進路実現のため、校内でも「特別選抜入試対策講座」を開講し、放課後を使って意識の高まった生徒のフォローをしている。
学校推薦型選抜の受験指導	▶指定校は高3・1学期の模試でC判定以上を取っていないと本人が希望しても推薦をしない。▶C判定に至らない生徒には早めに一般選抜に切り替えてがんばるように指導。▶本気で学校推薦型選抜を狙っている生徒に対しては、マンツーマンで手厚く指導する。例えば、看護学部志望者には、単に入試を突破するためではなく、職業観を育み、看護師に求められるコミュニケーション能力を養うべく、ディスカッションやプレゼンテーションの練習を通じて、思考力・判断力・表現力を磨く準備をしている。	▶指定校推薦の希望者には、まず同大学の総合型の受験を勧めている。一度、自分の力を発揮することが大事だと考えるため。総合型で合格できる生徒が多く、結果として指定校推薦をキャンセルするケースもある。▶学校として推薦するかどうかは9月末の会議で決定。模試や校内テストの結果、部活動や生徒会活動の状況、取得資格などを総合的に見てその枠にふさわしいかを判断する。場合によっては推薦しない。	▶年内入試は出願準備や小論文・面接対策など、生徒、教員双方の労力がかかるわりに、合格につながらないケースも少なくないので、積極的に勧めにくい。▶学力試験では難しいが、小論文をトレーニングすればチャンスがありそうな生徒には学校推薦型を勧めるケースもある。▶学校推薦型を受験する生徒には、必ずディプロマ・ポリシーを調べたうえで志望理由書を書くよう指導している。	▶志望大で学びたいことが明確に決まっている生徒に対しては、合格のチャンスを増やすために学校推薦型の受験は推奨しており、募集枠が増えるとさらに勧めやすい。▶ただし指定校については、深い考えもなく早く合格を決めたい生徒が希望する傾向もあり、入学後に中退する者も出ていることから、本当に第1志望か、複数の視点から確認したうえで推薦するようにしている。例えば、模試の志望校判定に記載しているか、国際系学部であれば英語資格試験を受検しているか、など。	▶指定校推薦も自身の希望する進路の実現に向けた一つの方法。生徒の第1志望とマッチするなら指定校推薦を推す。▶一般選抜での合格をめざしつつ、実際に受験する方式は各生徒の意向や向き・不向きもあるため面談を重ねながら、どの方式がよりよいか、共に探っていく。	▶進学選考会議を9月初旬に行い、推薦する生徒を決定する。▶指定校は入学を約束することになるため、9、10月に総合型選抜を受験する予定の生徒は、指定校を同時に希望することはできない。生徒にもそのように伝えているので、総合型選抜で上位校に十分勝負できる可能性を持った生徒が、チャレンジせずに中堅校の指定校推薦枠に収まるケースもある。生徒の可能性を狭めないように、希望者を対象に開講している「特別選抜入試対策講座」を通して、緻密な受験指導を行っている。
生徒に勧めたい学校推薦型選抜	▶本校に訪問することもなく紙一枚送ってくるだけで、急に評定平均を下げたり、枠が増えたりする大学の指定校推薦は勧めない。逆に本校のことを信頼して基準の評定平均を設けなかったり、「5年に一度でも合う生徒がいたら推薦を」というような大学には、生徒を安心して送り出せる。公募制についても面接時間が短時間だと生徒の何がわかるのか疑問だ。▶生徒の力を見るのではなく、受験しやすい入試にするのは適切ではない。その点、**東洋大学**は以前から、生徒の努力を適切に評価する学力重視の入試を実施していて、信頼できる。▶私自身、道内の大学はもちろん、首都圏の大学にも積極的に見学に行くようにしている。**千葉工業大学**を訪問したときは、学生の対応がすばらしく、日頃から教員や学生同士のコミュニケーションが多いのだろうと感じた。	▶学校推薦型は12月に結果が出るため、不合格だった場合、一般選抜に向けたリカバリーが難しい。関西でよく見られるような「書類等の準備負担が軽く、学力検査型」の推薦入試が関東の大学でも広まれば、一般選抜の前哨戦として活用できる。学力重視かつ併願可能だと生徒に勧めやすい。▶指定校推薦に関しては、例えば、英語資格試験のスコアなど、評定平均以外の要件があることが望ましい。生徒が「大学に入りたい」という気持ちが強い時期に、評定平均以外の要件がない指定校枠が出てくると心が揺れてしまい、結果的にミスマッチを起こしかねない。▶年内入試は大学の評価基準が抽象的でわかりにくい。合格確実視していた生徒が落ちたり、逆もある。理由がわからないと適切に指導ができないので、一部の大学が行っているように評価基準を開示したり、それに基づくアドバイスなどもしてほしい。	▶学校推薦型は何らかの形で学力を測ってほしい。例えばある大学の法学部の学校推薦型選抜は与えられたテーマに対して、自分で調べて考えを書く「自己申告書」の提出が必須になっている。関連書籍を読み、理論を構築しながら書かなければならないので、課題の難度としてちょうどよいと感じた。▶「受験しやすさ」「併願可」ばかりをアピールする年内入試は、好ましくないと感じる。専願にしたほうが、大学にとっても「本当にこの大学で学びたい」という学生が来るのではないか。▶本校は「できるだけ国公立をめざしてほしい」というスタンスだが、私立大には、それを上回る魅力を見せていただきたい。	▶志望理由書の作成は手間がかかるが、生徒の成長にもつながる。**横浜市立大学**や**公立はこだて未来大学**のように、卒業後の就職先やキャリアについて詳細を公表している大学だと、将来のビジョンから大学で何をしたいのか考えやすく、**名古屋大学**のような学びを社会にどう生かすのかまで問うような入試も勧めやすい。▶**金沢工業大学**や**京都薬科大学**は、指定校推薦入学者の大学生活や成績推移、就職先等を、高校訪問時に共有してくれるので、安心して送り出せる。▶年内入試は全般的に合否基準が不透明。せめて合格した生徒はどこを評価したのか情報提供を。**都留文科大学**は高校での活動の評価ポイントなど明示してくれる。	▶勉強が苦ではない生徒に対しては、5教科の勉強をがんばってもらうために、共通テストを課す公募制推薦を勧めたい。一方で、5教科の勉強に不安を感じる生徒には、小論文や面接の配点が高い入試、共通テストを課さない入試、共通テストの教科数の少ない入試などが適し、同じ公募制推薦でも勧めたい入試は変わる。特に共通テストで課される教科数は、生徒にマッチしているかどうかを判断する軸になる。▶教員に年内入試の情報をより詳細に把握してもらう必要がある。そのため、入試説明会や大学の発信している情報を逃さずチェックして情報収集し、より迅速に具体的に担任や学年の教員と共有することを心がけている。	▶大学の求める人物像が伝わる入試内容だと、生徒とのマッチングを考えやすい。例えば、ある大学の医学部の小論文で「農業体験で農家の人がおにぎりを握ってくれたが、誰が握ったかわからないものを食べない生徒がいた場合、どう指導するか」という問題が課されたが、受験生に求める資質が考察できるので、生徒に勧めやすい。▶学校推薦型選抜は、勤勉なだけでなく「何かに特化した自分の強み」を持っている生徒が希望する傾向にある。そのため小論文、筆記試験、面接など、いくつも試験が課される入試よりも、非認知能力に代表される「自分の強み」を発揮できる入試のほうが勧めやすい。▶**広島修道大学**には、英語資格試験のスコアを出願条件とし、試験は面接しか課さない方式がある。生徒に明確な目標を持たせやすい。